2020（令和 2 年 11 月 28 日）　第 36 号

高槻・五領の環境と
子どもの未来を

守る会 News

発行：高槻・五領の環境と子どもの未来を守る会

12 月定例会は、大倉清教氏の講演会を予定しています。
　コロナ渦の渦中ではありますが、マスクなど対策の上、是非お集まりください。

次回定例会　12 月 26 日（土）16 時～　大倉清教氏　講演会予定

“「デザイン思考」で高槻市の未来を考える”

私の専門は、「デザイン」です。
「デザイン」は一部の専門家やデザイナーの仕事だと思われるかもしれませんが、何かを意図して作るときに必ずデザイン行為があります。デザインの本来の語源は、計画や創意工夫であり、単に絵を描いて恰好よくすることではありません。
　また、ものだけを対象にするものでもありません、人生のデザイン＝ライフデザイン、仕事のデザイン＝ワークスタイルデザイン、職歴のデザイン＝キャリアデザインなど、さまざまな分野で応用され、企業経営や国家戦略にも「デザイン思考」が取り入れられます。
　そして、デザインは特別なものではありません。手法を会得すれば誰でもできるようになるのです。近年では利用する人によるデザインが注目されています。つまり使う人がデザイン手法を使って自らの環境や道具を作り出すことが大切であり、持続的に運営をするための不可欠な要素となっています。
　海外では市民参加の社会実験として、フューチャーセンターやリビング・ラボが活動しています。
　今回の講義では、デザイン思考を紹介し、私たちの高槻市の未来を「デザイン思考」で参加者の皆さんといっしょに考えてみたいと思います。
　　未来はやってくるものではなく、作ることができるものです。

講師現職	ケプラデザインスタジオ代表
講師経歴	1954 年　富山県生まれ 1977 年　金沢美術工芸大学卒業 1977 年　コクヨ株式会社入社 2001 年　ケプラデザインスタジオ設立　代表 2011 年　「空間戦略研究会」代表 2012 年　「知的オフィス環境推進協議会」特別会員
参考	産廃焼却炉建設反対協議会幹事　“かわせみ”ポスター作者
専門分野	スペース計画＆空間デザイン 各種事業計画およびプロジェクトマネジメント
推奨図書	オフィスビル 2030（オフィスビルディング研究所）：白揚社　共著

12 月　NO_2 簡易測定　中止　について

　毎年、五領地区に於いて 6 月、12 月と年 2 回実施しております、NO_2 簡易測定は、次回 12 月 3 日に予定していましたが、現在のコロナ感染状況を考慮し中止と致しました。
　次回は、来年 6 月に実施の予定です。

ちび火考　（1）

小山田　徹

私が幼かった昭和 30 年代後半までの鹿児島では、街の様々な場所で焚き火が朝な夕なに行われていた。知らない人の焚き火場に子供達は平気で当たりに行き、知らない人とおしゃべりし、火を焚かせてもらったり焼き物のイモなどをいただいたりしていた。あまりに普通の事で、数年後に世の中から消えていくなどと思いもよらぬ事だった。高度成長期で街に隙間が少なくなり、近隣との関係も疎遠になり、いつの間にか世間の人々は焚き火の煙を、洗濯物に付き、家の中にこもる不快な匂いとして文句を言うようになった。通報された消防等は規制せざるを得ず、おおらかに街中で焚き火が出来る時代は終焉を迎えた。同時に、各家にあった竈や薪風呂、薪ストーブはガスに代わり、家の中からも直火は消えていった。風呂焚きが当番だった子供達は受験戦争に駆り出され、たまに行われるキャンプファイヤーやキャンプ炊飯、祭りの焚き火などは大人の管理するものとなり、子供達は用意された火を穏やかに、予定調和的に体験するだけになり、子供達と火の関係は閉ざされた。

人類が初めて直面する事態。

人類の歩みは焚き火と共にあった。人類の脳の発達には火でデンプンを加熱出来るようになってから急速に発達したとの説もある。実に 10 万年以上に渡り、人類は毎晩火をながめる生活を繰り返してきた。毎晩…。この事が人類の感覚、思考、価値観に多大な影響を与えた事は想像に難くない。この連続性が断たれたのである。不安を感じずにはいられない。たかがひと世代も経たないうちに重大な感覚を忘れてしまう。利便性と引き換えに失ったモノはなんだったのだろうか?昭和の漫画家滝田ゆうのエッセイに「しあわせのしわよせ」というくだりがある。炊飯器登場の頃の皮肉なのだが、しあわせのしわよせはきっとやって来るだろう、と。便利な電気製品が出始めて、生活の中の労働が軽減されていく便利さの末、余った時間を過剰な消費社会が侵略を始めた。核家族が増え、皆がマイホームを購入しローンを組んで、お父さんは朝から晩まで家に居なくなった。家庭ではできた余暇をテレビが埋め始めた。子供は忙しくなり、家庭内の手伝いをあまりしなくなった。電子レンジなどの便利な機器が増え、個食が増えた。

町中も隙間がなくなり、広場や路地、道路などで遊べなくなり、焚き火も目に見えて減っていった。隣近所の関係が薄くなり、会話や行き来がなくなった。今や殆どの人々がコンピューターといえる携帯を持ち、架空の空間に張り巡らされた網の迷路に入り込んでいる。隣の人に直接会話せずにツイートする。なんという“しあわせ”だろうか。

私は、上記の“しあわせのしわよせ”が、全て人類が火から遠ざかったせいであるとは言わないまでも、火と付き合うゆとりを失った事がおよぼした影響は大きいと思っている。要は、ゆとり、時間、無駄のなさが、人々から思考と、多様な関係の可能性、多彩な経験、多くの失敗を奪い、効率を基本とする均質化した社会を作り上げているのだ。もはやゆとり、時間、無駄などは努力して作らねばならない時代になったのだ。ならば意識して焚き火をするしかないのである。焚き火はゆとり、時間、無駄に直結しているのだ。

阪神淡路大震災、昨年の東日本大震災の時、様々な人々が様々な場所で焚き火をする事で生き延びたという話を数多く聞いた。壮絶な焚き火だったと思う。寒く凍てつく夜中、方々で熾された焚き火の火を見ながら、互いの存在を感じ励まし合ったという話を聞くと、我々の身体には未だに太古からの焚き火の記憶は遺伝子化されて刻み込まれているという確信を持つのである。と同時に、今の我々、若者たちは、そのような緊急時に火をちゃんと熾せるのだろうか?燃やせるものをちゃんと選別できるのか、濡れた木材に火をつけられるのか、安全に燃やせるのか、調理は出来るのか、色々と不安になってくる。今までは火に慣れ、火に親しむ地域、職業の人々がまだたくさん存在していたが、今後、火から離れた生活をおくる人々が増えてきたらどうなるのだろう?焚き火が本能に直結した技術ならば、その技術は全ての人が可能な限り習得し、研鑽すべきものであろう。遺伝子を途絶えさせてはならないのだ。我々はまだまだ様々な環境と状況を生き延びなければならないのだ。

次号へ続く

『文化／批評[cultures/critiques]　臨時増刊号』（2012 年 3 月 20 日
発行：国際日本学研究会、大阪大学大学院文学研究科日本学 川村研究室）より

編集部　：　新型ウイルス感染症は３次目のピークを迎えようとしています。かなり身近にまで迫っていると実感出来る今日この頃です。外出する時は、感染対策だけは万全にして出かけましょう。

/守る会」定例会は、毎月、第 4 土曜日
１６：００～１８：００、上牧公民館
（上牧町本澄寺前）で開催しております。

連絡は、事務局村井（masa569@tcn.zaq.ne.jp）　迄

発行　：　高槻・五領の環境と子どもの未来を守る会
代表　：　上田　博夫
住所　：　〒569-0003　大阪府高槻市上牧町
１丁目 3-17　上牧公民館内
電話番号：　０９０－２２８３-１６１９（村井）

ホームページ　：　https://takatsukigoryo-mamorukai.jimdo.com